自由意志についての一考察

―スピノザ哲学を中心に―

研究生　鈴石　忠司

スピノザの主著『エチカ』は、自由と意志との伝統的な結びつきを断ち切ることにあった。意志のままに選択や創造さえなしうる能力と捉えるにせよ、価値規範にしたがって己を律しみずからそれを体言しうる能力としてとらえるにせよ、自由といえば意志と結びつけられて解されてきたのである。神の自由も―キリスト教的背景が含まれているとしても―そのような自由と同列のものとして捉えてしまうと論理的可能性として結び付けられてしまうのである。気まぐれさや、無力さがこうして神の力能のうちに持ち込まれてしまうことになる。気まぐれさとは、神はそうしようと思えば別のものを創造することができてしまうことである。無力さというのは、可能性のモデルによって神に力能が制限されてしまうということである。（ジル・ドゥルーズ『スピノザ実践の哲学』鈴木雅大訳、平凡社、二〇〇二年、一二七頁）

こうした一般的見解である、自己理解は、近代以降の西洋哲学の主流のようにみえる。ただし、スピノザに関しては独自の見解を持っている。それは即ち、すべてを「必然性の下で」考えていたということである。自由と必然性を対立的に捉える一般的見解に対して、スピノザが必然を積極的に受容することこそが自由なのだ、という見解を対置したのか、その根拠を探ることが本論の趣旨である。

スピノザの原則は、自由は決して意志の特質ではないということである。意志は思惟の一様態であり、他の原因によって決定される。例えその原因が思惟という属性のもとでの神の本性であっても変わりはないのである。すべての存在するものは必然的に存在するのである。ただ一つ自由な原因といわれるべきなのは、「自己の必然性のみによって存在し、自己自身によってのみ作用へと決定される」場合においてなのである。神が自由なのは、一切のものが神自身の本性から必然的に生じるからであり、偶然的に創造するからではないのである。自由を自由たらしめているのは「内的な」必然性であり、「自己の」必然性なのである。人は決して歴史的、宗教的な規範によって自由なのではなく、その本質や、本質から生じるものによって自由なのである。

ではその意味で人間は自由なのだろうか。意識が勝手に思い込んでいる自由は、実は錯覚にしかすぎないのである。神の場合以上に、人間が自由な意志をもっているということは不可能なのである。しかしその代わり、各々の人間は、一つ一つ本質を有している。換言すると、力能の度合いをもっている。人間がなんらかの十全な観念を形成したときには、必然的に能動的感情が生じるのである。ただし、その人間自身の力能によっておのずから展開されるのである。

このとき、人間は自由となりえるのである。だから、人間は生まれてもって自由なのではなく、自由になる、あるいは自由になれるという他ないのである。